

本文9ホ 25行 26年又録組

その時借りの
てる大

(1)

晩	う	小	の	新	ま	立	に	時	一	と	と
は	十	旅	は	新	ま	場	に	は	杯	仕事	と
帰	日	館	を	が	ち	な	は	は	飲	月	と
つ	は	を	さ	時	持	の	急	集	ん	屋	の
て	かり	あ	さ	新	か	に	集	者	を	出	朝
来	り	つ	く	仕事	ら	却	者	が	を	た	は
こ	白	。	ほ	部	た	っ	が	原	出	朝	色
こ	い	。	の	屋	。	っ	原	稿	た	色	不
こ	一	は	四	を	。	て	稿	の	。	。	。
に	通	新	面	借	。	仕事	最	後	。	。	。
し	つ	年	街	り	。	か	後	と	。	。	。
あ	あ	多	に	ら	。	ら	と	取	。	。	。
あ	た	小	近	こ	。	離	ら	り	。	。	。
が	。	説	い	こ	。	れ	ら	に	。	。	。
。	朝	書	好	ら	。	い	あ	来	。	。	。
。	家	く	ま	に	。	あ	が	こ	。	。	。
。	を	な	社	し	。	ま	ま	こ	。	。	。
。	出	め	ら	て	。	。	。	こ	。	。	。
。	て	い	い	あ	。	。	。	こ	。	。	。
。	。	ふ	ふ	ま	。	。	。	こ	。	。	。
。	。	。	。	。	。	。	。	こ	。	。	。



K-K

仕事部屋付近

文士にとって、仕事部屋の朝の目覚めほど味気ないものはない。目をさます途端、追い立てられている仕事に浮んで、やり場のない愚托がはじまるのである。

で、その朝は朝飯を終えると、私はふらりと仕事部屋を出た。駅前へ行って、コオヒを一杯飲んで来るつもりだった。ひる前の十一時には編集者が原稿の最後を取りに来ることになっていて、寸時も仕事から離れられない立場なのに、却って仕事から離れたいわがままな気持ちからだった。

私が時折仕事部屋を借りることにしていて、その時も借りていたのは、おぎくぼの四面道に近い好季荘という小旅館であった。私は新年号に小説を書くために、もう十日ばかりそこへ通っていた。朝家を出て晩には帰って来ることにしていたが、抄が行かなくて、ぎりぎりの締切が迫るとともに、泊り込みを余儀なくされていたのだ。

上林 106 P 時元

新力ナ半音略字 別冊

場が行かなくて